

自覺 沈痛なる自己發見

一 自己を知るは自己を修むる也

人生問題と云はず、社會問題と云はず、宗教問題と云はず、自己といふ事を離れては、何事も無意味に終つて了ふ。經典を研究する、傳記を研究する、師匠に就く、孰れにしても、自己の修道と云ふことが土臺でなくてはならぬ。自己修道の第一歩は自己省察である。自己とは何ぞや。自分とは云何な者であるかを、省察して見るのが入道の第一歩である。第一歩と云ふよりも、寧ろその中心である。終局である。希臘のデルフォイの神殿の入口には「汝自身を知れ」と書いてある。横川の源信僧都は「夜もすがら佛の道を求めつゝ己が心に尋ね入りぬる」と詠ぜられた。道は邇にあり。佛法は脚跟下なり。衆生近きを知らずして、遠きを求むる愚さよと云つた有様。禁内底に達する大道も、近く墻外底の小路よりせねばならぬ。遠い他國に旅するには、先づ自分の家の軒下から足を運んで行く。佛になる道も遠い高い處にあるのではなくて、近く低く我が心の中にあるのである。

自己を省察せよ。自己を見究めよ。自己を發見せよ、自己に徹底せよ。自己とは如何なるものなるかを究明せよ。古聖は全力を注いでこれが研究に盡された。釋尊が王宮を出で、修行せられたのも、自己を明かにする爲であつた。傳教大師が一卷の『法華經』を懷にして四明ヶ岳に籠られたのも、自己を明かにする爲であつた。法然上人が黒谷の報恩藏に大藏經を五遍まで繰返して御覽になつたのも、自己を明かにする爲であつた。親鸞聖人が二十年かゝつて道を求められたのも、矢張り自己を明かにする爲であつた。弘法大師の入唐も、道元禪師の渡宋も、要するにこの自己とは何ぞやの問題を、解決す

る爲に外ならない。

昔、嵩山の少林寺に黙坐して居る達磨大師の許へ、雪中に起つて臂を打斬りつゝも、熱心に道を求めた慧可に對し、大師は最初に「汝の心を持つて來い」と申された。私共は教の前に此心を持つて行くべく、先づ私の心を見付け出さねばならぬ。

二 鏡に打ち向ふとき

『韓非子』に曰く「舌之人目短、自見、故以鏡觀面、智短、自知、故以道正行。故鏡無見疵之罪、道無明過之怨。故目失鏡無以正鬚眉、行失道無以知迷惑」。自己を知る者は自己なりと云ふも、徹底して眞實に之を見之を知るは、決して容易の業でない。云何しても鏡に依り道に依らねばならぬ。私は此の鏡を見るに五つ態度があると思ふ。

不圖鏡に向つた時、人はどんな感じを起すであらうか。自己の面相其儘が正直に明かに映し出された刹那、その刹那、先づ胸が轟くであらう。ハツとするであらう。一種の軽い驚と怖とを懷くであらう。是れ正に自己を觀照した態度である。然り鏡は本現在有の儘の姿を、有の儘に映し、有の儘に見るべきものである。

姿を映し見るだけの鏡が、多く化粧の用に供せられてある。自己の眞相を見やうとはせで、却て自惚を以て不美を糊塗せんと企てる。西洋の誰かは、女一生の間に鏡に向ふ時間を計上して、何十ヶ月とかになると云つたが、夫は殆ど全くお化粧をする爲なのであると。白粉下とか云ふものゝ其下に尙、厚々と自惚と云ふものを塗付けて居はしないか。

夫が出来ねば努めて其の缺點を辯護にかゝる。目元は少なんだが口元が云何とか。鼻恰好はどうぢやが頬恰好は何とか、引張つたり摘んだり、如何に

もして美點を見出さうと苦心する。年寄つて梅干のやうになつた婆さんは「皴が寄つたのではない皮がたるんだのぢや」と云つたさうな。

愈それも及ばねば罪を鏡に擦つて了ふ。至つて不別嬪な若い女は「是は鏡が悪いんだ、私の顔はこんなではない」と、鏡を大地に投付けたとか。

更に夫も出来ねば、自己の姿でないと、白々しくも映つた影を否定する。

幼い子供に鏡を見せて「これは何處の子」と尋ねたら「よその子」と答へたと云ふ。

世は總て私の姿鏡である。鏡は至る處に懸けられて、私の姿は至る處に映つて居る。油斷のならぬ世界だ。野にも山にも書齋にも街頭にも人にも物にも、悉く現實有の儘の自己が発見せらるゝ。之を究明せねばならぬ。

三 あゝ私が映つてゐるのか

鏡と云ふものを知らぬ山奥の者が、偶町へ出て鏡屋の前に通りかゝつた。不圖昨年亡くなつた父親に出逢つたものだから堪らない。ものゝ小半日も立ちつくして、父懐かしの涙に咽んで居る。呼べど答がない叫べど返事がない。店の人に怪しまれ父が居るからとて、買ひとつて喜んで持ち歸り、長持の中に收め、暇さへあれば打眺め、話をしかけて欣々然として居た。妻なる人が之を怪しみ、留守の間にそつと長持の蓋をとれば、こは如何に己に似よつた美婦が潜み居らんとは。驚き且つ怒り、夫に其無情を詰る。夢にも知らぬ男は極力之を否定する。物騒ぎに驅付けた日頃知合の尼さんが、正體を見付けて來ると、鏡に映つた己が姿を姿とも知らず、「御安心なさい。其女は早出家して頭を圓めて居ます」と云つたので、一同は呆氣にとられ、やつと氣を静め、ほつと一息したとの昔譚。

三人が三人共、自分の姿を眺めて居ながら、自分の姿とは氣付かずに、人

の姿とばかり思ふて、泣いたりわめいたり怒つたり慰めたりして居る。人生の凡は皆こんなものだ。私共も至る處に映る自分の姿を眺めて居ながら、自分とは思はずに人の姿とばかり思ふて居る。氣を付けねばならぬではあるまいか。

蠅が天井に止まつて吾々人間を見下して居る。吾々は蠅が顛倒になつて居ると思ふけれども、蠅の方では人間は顛倒になつて居ると思ふであらう。焉ぞ知らん。自分が顛倒になつて居るから、他が顛倒に見えるのではなからうか。隣の家の障子の破れを笑ふ人が、何ぞ計らん、自分は我家の障子の破れ穴から覗いて居る。變なものでせう。「あの人はどうも自分を深く信用して呉れない」と不平を云ふ前に、此方が打解けて居ないのでないかと顧る。姑が愛して呉れぬと愚痴を零す前に、此方が姑を常に疑つて居はせぬかと反省する。茲が大切で。信用して呉れないのも、愛して呉れないのも、此方が信用せず愛せぬのが映つたのではあるまいか。

四 自己を見失つた人々

大勢の盜賊が、盗み取つたものの中に積み置き、夫々分配を始めた。「その頭巾は、藥罐の勘助が頭を隠すに恰度よい。勘公一つ被つて見ろ、どうだ暖かだらう」。「俺は婢奴が大きな腹を抱へて、もう臨月に間もあるまいから、其方の端の檻樓を貰つて往かうか。オツと其子供のちゃんく子も呉れ、餓鬼が出来たら着せるから」。「此の縮緬の被布は云何する。誰も之を着るやうな可愛い奴を持つて居る面がないな。賣り飛ばして金にしてから分けやうか」。「時に烟草入が一つあつたが、あれは云何した。革はつまらねへもんだが、緒締の珠が珊瑚の六分で、金物は金彫の唐獅子、筒が象牙だ。仲々贅澤だ。棄賣にしても百兩は大丈夫よ」。「さうくあれは大したものだ。誰も隠

しや仕なからう」と詮議をしたが、更に見當らない。頭立つた賊が不思議に思つて、子分一同を見渡し「はてな、此中に盗みさうな奴は誰も居ねへがな」。盗賊も盗賊と云はれたくなく、又云ひたかないと見える。こゝが本心のあの證據。けれども之と同時に虚榮虚飾の念が伴うて、進んで我身を忘れるのが情ない。悪人になりたくないのはよいが、自らそのなりたくない悪人たるに氣付かぬのは、残念でないか。

昔、或禪僧が女郎買に參りました處、相敵の女郎が非常に寢坊で一向に眼を覺さない。頻りに呼び起しても更にこたへぬ。何か悪戯でもしたら眼を覺すであらうと考へ、彼方此方見廻すと枕元に鏡臺がある。鏡臺の抽匣を開けて見ると、中に剃刀が一つあつた。これ幸と剃刀で女郎の髪を一剃ちよと剃つたが、女郎は白河夜船で鼻から提灯を出して居る。二剃ヂヨリとやつたが、矢張口をあいて大息をふいて居る。三剃目をヂヨリぐ剃つたが、同じく雷のやうな駢をかいて死んだやうに爲つてゐる。かくして女郎の頭を全く坊主に剃つて了つたが、まだ眠つてゐる。さあ憊うなつてみると、禪僧も心配でならぬ。此儘で女郎の眼が覺めたら大變ぢや、早く逃げやうと、忽ち用意を調べて女郎屋を飛び出し、一目散に逃げ去つて了つた。女郎は坊主にされたのも知らず、夜が明けて漸く眼を醒ましてみると御客様が居らぬ。これはと周章狼狽きつゝ、「御客様は何處へ行つた。御客様は何處へ行つた。坊さん何處へ行つた、坊さん何處へ行つた」と云つて、寢惚氣眼で捜し廻るうちに、不圖自分の坊主頭に手が觸れた。すると「やれく坊さん此處にゐるか、それなら私は何處へ行つたらう」と申したと云ふ話がある。

馬鹿氣た話ではあるが、うっかりすると、自分を捜し廻つても解らぬ事がある。自己を失却して了つては困る。が併し自己を捜し出さうとする努力だ

けは、確かに賞すべきである。

五 自己に氣付かぬ人々

いつも好んで高い庭樹の上に座禪する道林和尚。鳥巢禪師と云はれて居た位、毎日鳥の巢の様に樹の上に御座つた。處へ當縣の知事に新任した白樂天、詩文の大家であるのが、和尚に面會とやつてござつた。「和尚何處に」と案内を乞へば、樹の上につくねんとして眠りかけてござる。下から「和尚危い」と聲をかける。上から「貴公こそ却つて危いぞ」ときた。樹の上によつて眠りかけて居る人よりも、地の上に立つて居る人が餘程危いとは、一寸受取れぬ話。屋根屋と疊屋と同じ家に仕事して居る。屋根屋は上に、疊屋は下に互に精出して居る。下から疊屋が聲張上げて、「同じ仕事をするのなら、そんな高い處で危い藝當するより、下で安氣に仕事したがよからう」と云へば、屋根屋も負けては居らぬ。「何ツ馬鹿な。昔から屋根の上で死んだ者はないが、疊の上では幾程死んだか解らぬぞ」とやつたさうな。そんなものだ。高い處よりも低い處の方が、却て危い。實際一番に恐い處は寢床である。大方人は寢床で死ぬる。人の多く死ぬ處は寢床であるにも拘らず、狎れては平氣で、寢たほど樂なものはないと云ふ。

こんな調子でやりこめられた白樂天。「佛敎の奥義如何」と問へば、「諸惡莫作衆善奉行」と答へらるゝ。「其位のこととは三歳の孩兒も知つて居る」と、聊か冷笑の風あると共に、禪師言下に聲勵まして、「三歳の孩兒之を道ふは易し」と雖も、八十の翁も之を行ふは難し。聞いて白樂天總身に汗を催し、是は今迄我身知らずであつたと、直に佛敎に歸入せられた。

六 自らなる自己の表現

来て告ぐる人なかりせば衣手に、かゝる玉をも知らずやありけん

白樂天も危いと注意せられ、知ることは出来ても行ふことは難いと誠められて、ハツと危い弱い自分と云ふものに氣付き、進んで法を求むるに至つたのである。以上の如く我々は何時も、自己と云ふものを忘れ勝ちである。自己の真相を究明することは、何時も怠慢しながら、知らず識らず、その自己が相を現はし、勝手を定め込んで居るのを氣付かない。否之が尙自己を知らないと云ふものであらう。

或る面師が熱心に面を彫つて居る處へ、友人がやつて来て「君は大變凄い顔をして居る」と云うて行つた。面師はこの言葉を何とも思はずに聞いてゐた。其後かの友がまたやつて来た。彼は同じく面師の顔を見て「今日は大變善い顔をしてゐるな」と云つて呉れた。面師は此の時考へた。云何して日によつて己の顔に相違があるのだらう。熟々思ふてみると不思議である。先日は般若の鬼面を彫つて居た。ところが面師の顔が凄く成つて居ると友が云ふた。而して今度は丁度、惠比須大黒の福面を彫りつゝある時であつた。面師は此事に氣付いて尠からず驚いたさうである。私共の本性は毎日何を彫つて居るのであらうか。地獄でないか、餓鬼でないか、畜生でないか。

越前の吉崎は蓮如上人の御舊跡地である。彼處には「嫁嚇の面」といふのが遣つて居る。或は「肉つきの面」とも云はれて居る。婆さんは大の佛法嫌ひで、嫁は至つての信者であつた。嫁が吉崎へ參詣するのを忌々しく思ふて、或晚歸つて来る途中で威してやらうと考へた。鹿島明神の神殿にかゝつてある般若面を借用して、鬼の姿になつて躰から嫁を呼んだ。嫁は驚いたが、如來様が在ますと思ふたら、心丈夫になつて念佛しつゝ我家へ急いだ。歸つて

見ると婆さんが居ない。家は眞暗である。燈火をつければ室の隅に何か跪つてゐる。耳を澄せば泣聲がする。近寄つてみれば、婆さんが面がとれないと云うて泣いて居る。先程の鬼の正體は是かと思へば、却て氣の毒な。云何しても取れぬ。夜が明けたら困ると婆さんは益々泣く、神様の罰か佛様の御方便かに相違ないと、嫁は婆さんの手を引いて蓮如上人の所へ參つた。御前へ出て婆さんが廻心懺悔した處が、面がポロリと取れた。顔の皮が剥けて面にくつついたと云ふので「肉つきの面」と申し傳へて居る。何だか變な造り話のやうに聞える。けれども或人は之を斯う云ふ風に解釋した。味ふべき事と思ふ。初め婆さんが面を被つた時は、威してやらうと思ふ恐しい鬼の心があつたから、之が顔に現れて般若面と相應じ、コボリ填つて取れなくなつたであらう。後に蓮如上人の所へ行つて懺悔の涙を零した時、恐しい心が折れて佛心になつたから、もう面とは合致なくなつて、ポロリと取れたのだらうと戲言の様だが面白い。

七 躍つて出たぞ自己の性體

眞實に自己を凝視せよ、熱心に自己を探究せよ。一切は自己の姿鏡である。あらゆる物の上に自己の相を見よ。かつて何人が自己の惡相を發見せざるものがあらう。或人は熟々自分の身の上を考へて頻りに愚痴をこぼす。私は運が悪く、何處にも腰を落付けて居ることが出來ず、又此處へ戻つて來たのですが、今度は新聞記者にでもならうと思ふ。好い口があつたら世話して頂きたい。此方が思はしく無うて、地方へ出たのぢやつたが、何うも仲間の奴等が善くないので、又轉じて例の處へ移つて見たが、あそこでは亦上官が性の悪い人物で、とてもその下では勤められぬから、又止めて他の方へ勤めることにして、近頃まで其處に居たけれども、又私を憎む者やら妬む者やら

出來て、いろく悪口など云はれたものだから、到頭其處にも居られぬやうになつて、一寸國へ歸つて見たが、私の家は叔父が專横を極めて居るので到底も居るに居られず、又かうして此處へ出て來たやうな始末。本當に私は運が悪いので困ると、いろく愚痴りながら煩悶して居ると云ふ様子。併しこれほど我身の解らぬ男もあるまい。仲間が善くない、上官が悪い、叔父が專横である、而して最後に運が悪い。是では全く自分を眺めることを知らない人である。一言も「自分が不束であるから」「自分が愚であるから」と云ふことの云へない人ほど、氣の毒なものはない。仲間が不親切に見えるのも、上官が意地悪く見えるのも、叔父が專横に見えるのも、すべて自分自身の姿が周圍の鏡に映つて居る、その影を眺めて、とんでもない思ひ違ひをして居るのではなからうか。

日本の地位ある人が始めて洋行した折の事。此處彼處と宴會に呼ばれて大に歡待せられる。けれど何處へ行つてみても、色の白い男女の間に、たった一人なので、何だか自分の顔の色が氣にかゝつて仕方がない。こゝぞ日本男子の本領を發揮すべき所と、力んでみはみても、云何も氣後れがする。若しも女々しい顔色でも、他客に覺られなば、一大恥辱であると氣を勵まし、やをら椅子を離れて今しも立上らんとして、ふと向を見れば、這は如何に。短軀黎面の東洋紳士と覺しき一人が、是も椅子を離れて今しも立上らんとして居る。「さて變だ、西洋にも恁な人間があるかな。何だか不細工な色の黒い男だ。いや、これは矢張東洋人だ。是迄一向知らなんだが、自分の外に、まだ東洋人が來て居たか」と心中ひそかに喜び、何とはなしに歩み出せば、彼の紳士も、同じ方向に歩み出すので、益々心づよくなり、歩みながら紳士の方を向けば、彼の方よりも此方を向く。「さては彼も我を慕ひ居るな」と向きつ

向かれつ、しばぐそれを繰返しつゝ行つて、安樂椅子を見出し、それに身を横たへれば、彼も同じ姿勢で此方を見て居る。笑へば笑ふ、顰めば顰む。變な奴だと、尙も進んで顔つき出せば、額を鏡でこつん。これはしまつたり耻かしや。今まで東洋の紳士に能く似た奴と思つたのは自分の影であつたか口惜しや。能くく調べて見れば、室内に備へられた一大鏡面に、すつくり自分の姿が寫つて居るのであらうとは。「やれくとんだ彌次喜太であつたな」と微笑めば、鏡中の紳士も無言で微笑む、可笑しさよ。

油斷のならぬ世界である。何處に自己の姿鏡がかゝつてあるか知れぬ。その姿鏡には、自分で自分ながら笑つて居た筈の自分が、臆面もなく幅をきかして居る残念さ。この自分と云ふものに、氣のついた時、正しく開け來るのが、如來本願の大道であります。

八 露れ出でたか心の地金

いくら隠し匿しても、情ないことには、三の場合、人は屹度その地金を顯はすと、哲學者ベーコンは云つて居る。それは獨居の時と、激怒の折と、未經驗の際とだと。如何にも、獨居の時は飾ると云ふことがない。激怒の折は平生の謹を忘れる。未經驗の際は前例がないから腹の底の有合物を出すと云つた有様。地金とは何か、貪欲・瞋恚・愚痴である。吾人、果して怒りしことはなきか、恨みしことはなきか、欺きしことはなきか、僞りしことはなきか、謗りしことはなきか、疑ひしことはなきか、貪りしことはなきか、自暴自棄せしことはなきか。須らく内觀自省、日夜、行ふ所、言ふ所、思ふ所を精査せよ。「年月はかへらぬものを我ながら、驚かぬ身ぞ驚かれぬる」驚かぬ身と驚く所に覺醒がある。耻かしき身と耻づる所に、自己の真相に逢着するのではないか。

大和國の或山里に、態々母のため草堂を造つて、念持佛を安置し、法事供養を營むべく、南都西大寺の思圓房の上人といふを請待した者がありました。思圓房上人は形の如く叮重に讀經して、終に回向文を讀み上げる。「願はくはこの功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に佛道を成ぜん」。「何ツく、お上人様、あれは何と申すお經で」。「あれか、あれは回向文と云つて、今迄讀み上げたお經の功德を、法界衆生に悉く頌ち與へると申すことぢや」。「へい、法界衆生に……私は折角母のためにと思つて、斯うまでにして供養しますのを、悉く法界衆生に回向するなんて、そんな事をなされては、母の願分は、萱一筋にも當りますまい。それではならぬ。回向文讀みかへて、唯母のためにとばかり、遊ばされ候へ」と、親爺仲々ひどい意氣込。「まアくさう云ひなさんな。功德は回向すれば、愈大きくなつて失せる事はない。佛様を供養すれば、一切衆生に同様に頌ち與へて下さる。みんなが有丈の功德にあづかるのぢや」と細やかに教へられて、「さてはめでたい事にて候なり。但し隣に候、三郎檢校と申す者ばかりは除かせ給ひ候へ、あれは母親一生涯の敵でございましたから」と云ふ。それで回向文は讀みかへて、願はくは此の功德を以て、普く一切に及ぼす、但し隣の三郎檢校は除く。とかうやつてほしいと云ふのであります。恚う云ふ場合でも、尙且つ人は自我を發展させたがるものでせうか、飽迄我他彼此の考を起す、驚くべきは此處であります。

千五百年も前、初代の耶蘇教には、こんな物語があつたと云ふ。或る信者の母が死んで地獄に落ち、熱鐵の湯玉に苦まねばならぬことになつたさうです。此の事を知つた孝心深い信者は、胸も張り裂けるばかり、身も世もあられず、どうかなして其の苦から、母親を救ひたいものと、閻魔様の許に參

つて、せめてもの願ねがひに、裁判のお仕直しなほしを申出まをしました。通常つうじやうならば、叱しかり飛ばとされて罪つみにもならう處ところを、平生殊勝へいぜいしゆじやうな信心しんじんに免めんじて、閻魔えんま様は特別とくべつを以もつて裁判さいの仕直しなほしをなされた。ところが案あんの如ごとく、そこにたつた一つの見落みおとしがありました。この婆ばさんといふのは、吝けちの上うえにも吝けちで、吝しわんぼう家の親方おやかたでありました。只ただの一度いど、お菜さいの仕度したくをして居ゐる時とき、泥どろに汚よごれた葱ねぎの切端きりはしを、門先かどさきの乞こ食じきに恵めぐんでやつたさうです。「これは俺おれが見落みおとしであつた」と、閻魔えんま様は早速さつそくてん天使しを娑婆しやばに使つかはして、泥どろによごれた葱ねぎの切端きりはしを捜さがして持歸もちかへらせ、それを天使てんしに持もたせて、地獄ぢごくの釜かまの上うへに臨のぞませた。すると、込み上げるやうに煮にへ返かへる熱ねつ湯たうの中なかには、何千人何百人なんにんなんにんの人々ひととくが、上うへになり下したになり、茹蚰ゆでだこそつくりで悶もだへ苦くるんで居ゐる。信者しんじやの母ははは、不圖ふとあふ仰あいでその葱ねぎを見付みつけだし、今いまの苦くるしさにつけて娑婆しやばこひしさのあまり、手てを差さ上げて、その葱ねぎを掴つかんだのであります。と見たみ天使てんしは、その葱ねぎを引き上あげ、こゝぞと自分じぶんも高たかく登のぼつて行ゆけば、婆ばさんの身體からだも、だんくく空中くうちうに上あり、熱湯ねつたうの苦くるしみから出でて、涼すずしい世界せかいに入いることが出で来た。之これを眺ながめた釜かまの中なかの幾いく百ひゃく千せんの人々ひととくは、この苦くるしみから助たすかりたいばかりに、一人ひとりがこの婆ばさんの足あしを捕とらふれば、その次つぎの者ものが其その足あしをと云いふ風ふうに、澤山たくさんな人々ひととくが、足あしから手て、足あしから手てと繋つながつて、全然まるでにんげん人間の鎖くさりみたいにして、煮にえ立つ釜かまの中なかから外そとへ出でることが出で来た。處ところが婆ばさん熟つくく々かんがへた。「私は娑婆しやばであの葱ねぎを乞食こじきに與あたへたればこそ、今助いまたすけられるのである。私の助たすかるのは當前あたりまへだが、私の葱ねぎで皆みなんなの人々ひととくが助たすかるとは、あんまり虫むしが好よすぎる。一つ振ふるひ落おとしてやらう」と、足あしをひどく振ふつた拍子ひやしに、葱ねぎ持もつ手がはづれて、ざらぐざつと瀧たきつ瀬せをなして、皆みなんなの者ものが眞逆まつさかさ様に、まともとの煮にえ立つ釜かまの中なかへ落おち込んだと云いふ物語ものがたりであります。

一人にんの善根ぜんこんは能よく萬人にんを救すくふことが出で来きると共に、一人にんの惡あくはまた能よく萬

人を苦しめるのである。吾のみと思ふ獨覺心、人の難儀は百年でも堪へ忍ぶと云ふ心は、深く謹まねばならぬ。この酷似した東西兩洋の二つの話の上に、淺ましい自己といふものが、昭々白々しくも頭をもたげて居るではないか。覺醒するのは此處である。自覺の根柢はこの一刹那にあることを思はねばなりませぬ。

九 自己發見の戰慄

巨萬の富と花のやうな天稟の美貌と、雪のやうな純潔な性質とを有つた、若い貴公子ドリアングレイは、あらゆる人の羨望の中心であつた。友なる一畫家は彼を敬慕するの餘り、その美を永遠に傳へやうと、心血を注いで彼の肖像を書いて居る。時偶そこへ來り會はしたのが、極端なる快樂主義の權化ヘンリイ、ワットン卿。徐に肉慾主義の快樂説を説いて「だから我等は官能を鋭く磨いて、心ゆくばかりに肉慾を享樂せねばならぬ、卿のやうな天性の麗質を具へた若人に於ては、尙更の事である」と云ひ終つて去つた。肖像は出來上つた。グレイは改めて之に打ち向ふ時、今更の如く自己の美貌に驚いた、我乍ら我とは思はれぬまでに惚々とした。ふと「この美が何時まで保たれるだらう」。こんな思が電の如く彼の胸の奥に閃いた時、彼の胸は泣き出した。いまだに暗く閉ぢられる。途端ワットン卿の言は鋭い力と響とを彼に與へた。

夫已來彼の性格は一變して、全く快樂主義の人となり、肉慾の渦中に耽溺するに至つた。若い可憐な一女優を失戀の爲め悶死せしめたのを始めとし、異性に對するあらゆる慘忍な行爲をして敢て怖れなかつた。折々堪へ難い不安の念に襲はれる毎に、ワットン卿の教によつて、之を壓服し掃蕩した。あらゆる肉の香を求むる爲には、頹廢の空氣に漲つた魔窟にまで、出入するを

憚らなかつたのである。

斯の如き生活を續くること十八年、彼はふとして昔の肖像畫を見る氣になつた。久しく室の片隅に片付られた肖像の覆ひがとられると等しく、憤怒と痛恨と驚愕との叫びは、彼の口から迸り出ざるを得なかつた。若々しく美しいと思ひ切つて居た肖像は、何ぞ計らん、灰色の髪に兩眼凄く光り、額や頬には犍猛な皺が深く刻まれ、若々しい血潮は殺氣立つて滲み出て居る。とても二目と當られぬ惡魔そのまゝの姿である。これが十八年間に於ける、グレイの凄しい淺ましい實相であつた。頻りに起り來る恐怖と悔恨の念は、また同時に一種の反抗の念をも喚び起して、彼を戰慄せしめた刹那「この肖像畫はおれの靈だ。おれの良心だ。さうだ、これを打ち破つてしまへばそれでよいのだ」と、いきなり彼は肖像畫目がけて、銳利なるナイフを取り、グザとばかり突き刺した。夜陰に響く凄しい物音に、驅つけ來る給仕や女中、驚くまいことか、今の今まで若々しかつた、主人が、老衰した犍惡な凄しい惡魔の相となつて、而も我と我が胸をナイフで刳つて死んで居やうとは。そして若々しい主人の肖像畫は、嘲るが如く微笑むが如く、そこに掛けられてあつた。

あはれ、ドリアン、グレイは自己の肖像の上に、淺ましい凄しい惡魔のやうな、自己の姿を見せ付けられて戰慄せざるを得ないと共に、驚愕と恐怖と不安とは電の如く彼を襲ひ來り、これは自己の肖像でないとしら、をきる餘裕もなければ、辯護する暇もなく、白粉つけて紅さして、一時を胡魔化さうとする勇氣も出ず、強烈なる權威に打たれては、また如何ともすること能はず、狂氣の如く自己の肖像に一刀をあびせんとして、却つて自己の胸に怨の刃を加へたのであります。是れ恰も淨玻璃鏡の前に立たせられた時であります。

私共嚴正なる倫理の前には、自殺するの外はない。

あゝ此時、彼にして若しすべての罪惡を許容し、叱るに非ずして共に泣き責むるにあらざして共に咽び、これが爲めにとて起したる本願ぞ、怖れざれば安らかなれ一切の恐懼をして大安ならしむる我茲にありと、共に泣き共に咽ぶ大悲の親を、自己の上に眺め認めしならば、彼はそこに永遠の生命を得たであらう。新しき人となつて新しき生活に入つたであらう。不安と恐怖と驚愕に引きかへて、安住と歡喜と感謝とが、湧然として彼の胸に起り來つたであらうのに。

十 自己徹底の道

照す光は護る光である。映す鏡は教ふる鏡である。自分の姿を映す鏡は、自分の淺ましさを赤裸々に見せつけると同時に、其に加へられたる如來の恩寵を知らずする教である。此教の鏡の前に私共は詐らず、飾らず有の儘に自己の眞相を見て、自己に徹底せねばならぬ。鏡も影も共に否定する餘裕なく自己の眞相に驚き且つ感泣するのである。

宗教上教の鏡は、化粧の道具とし化粧の度を知るために用ひてはならぬ。世に老女の化粧ほど慘めなものはないとすれば、凡夫の顔にこてくと佛菩薩の装をこらす修行者の化粧ほど、慘めな氣の毒なものはない。白粉を洗ひ落とした所、紅を拭き取つた所、そこにこそ却つて、明瞭に自己本來の面目が現はれ來るでないか。何ぞそんなに強て化粧するには當らぬ、凡夫は凡夫でないか、悪性は悪性でよいでないか。その凡夫悪性を見込んでの佛があることを知らないのか。

宗教上の教の鏡は、自己辯護の用に供してはならぬ。世に自惚ほど醜いものはないとすれば、心を深くく觀じて佛性を見やうとし、心を細かくく

念じて、本源に觸れやうとする企や、我は佛である菩薩であるなど云ふのは、凡夫として及びもつかぬ自惚ではなからうか。自惚れる者は自己の缺點を知らないからである、辯護する者は自己の缺點を隠さんとするのである。共に眞摯なる求道者とは申されぬ。

思へば、親鸞聖人も初のうちは、いろくど自己を想像し、さまざま修行戒行によつて、新しく自己を造り出さうと、苦心に苦心し努力に努力せられたが、法然上人の教によつて、始めて『觀經』の下々品が自己の姿そのまゝであることを知られ、頓に我が計らひを止めて、その上に輝ける如來の大悲に、渴仰せられざるを得なかつたのである。「煩惱具足のわれらは、いづれに行にても生死を離るゝことあるべからざるを憐れみたまひて、願をおこしたまへる本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり」。『歎異抄』何たる偉大なる徹底味ではないか。

聖人はこの徹底味を以て、經典の上にも、七祖の上にも、日々起る事件の上にも、日々接する人物の上にも、靜かに自己を味はれたのであります。彼の流罪遠流の上にも、「これなほ師教の恩致なり」と自己の使命を感じ、此世からなる罪人の上にも、もらさぬ彌陀の大慈悲を味ひ給ひ、日野左衛門が門前に一夜を明かしては、下々品の惡機を身に味ひ給ひ、一夜の宿さへ借りかねたる罪業深い親鸞がために、是非とも助けずばおくまいと掛り果てゝ下された五劫思惟の本願が有難いと、お喜びになつたのです。常陸の辨圓が害心の懺悔を聞かれても、阿闍世王の上に自己を見たまひし聖人、別に驚かるゝ様子もなく、之を惡むより寧ろ自分の恐しい心に泣かれたのであり。平太郎の熊野詣でに於ても、いよく本地の誓約をお味ひになつて居たから、別に不思議とも感ぜられなかつたのであつた。

かくて聖人の宗教は、徹頭徹尾、悪性罪業の自己の上に注がれる如來の大
悲を仰ぐのである、罪に泣く者に對して共に泣いて下さる佛に抱かれて安住
するのであります。經典の鏡によつて發見せられたる聖人の自己は、佛とし
てでなく、菩薩としてでなく、聲聞緣覺としてでなく、實に二十五有界の衆
生、特に唯除と選ばれたる、五逆謗法の惡人としてであつた。「五逆の罪人を
嫌ひ、謗法の重き咎を知らせんとなり。この二つの罪の重きことを、知らし
めて、十方衆生皆もれず往生すべしと、知らせんとなり」『銘文』これ聖人が
大悲の親心に感泣せられた感謝の叫びであります。

求道 大道坦然前に開く

一 昭々坦々淨邦に通ず

私は私の家に歸るのであります。私の家は親の家でありまして、同時に私の家でもあります。他人の家に行くのならば、遠慮もいりません、氣兼もいりません。今行つては如何であらうか、果して行かれるであらうかと、氣遣もすれば、氣苦勞もします。豫め様子を伺つて置かねばならぬ必要もありません。が、我家に歸るのには、何の心配もいりませぬ。いつ何時の躊躇なく、ずかくと這入つて行かれます。諸佛菩薩の淨土ならば、歸らして下さいと願ひ祈る必要もありませんが、彌陀の親御の本國に歸るには、親の實意にまかせて、歸らうと云ふ氣の起る、それが求道であります。起るは私の心だが、起さして下さいる力は、蔭に親御の念力が働いて居るのです。「設ひ世界に滿てらん火をも、必ず過ぎて要めて法を聞け」と云ふ。親の本國に歸るには、何物をも打措いて、四圍一切に顧慮するなく、サツサと進み行けとの意であります。御親は常に喚んで下さる。互の間の墻壁を去つて、親子一體佛凡一體。大道は昭々坦々として淨土の都に通ず。上げよ重き尻を、立てよ弱い腰を。沈痛なる自己發見によつて、自己の眞價と尊嚴とを感じ來る時、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流さざるを得ないでないか。

けれども、我等が此の世に於ける生活は、獨り暮しである。とはいへ、一面賑やかな親付きである。佛の力は絶えず私に加へられ、我が血に佛の血は通ひ、我が肺に佛の息を吸うるのであります。靜かに此世の一面だけ眺めてみれば、實に一人一人のしのぎである。「後生こそ一人しのぎなり」とは蓮如上人の仰せなれども、後生までは待たで、今生こそ一人凌ぎなれ。今生が

すでに一人しのぎなればこそ、後生が一人しのぎであり、同時に亦前生が一人しのぎであつたのであります。近い所此世に於て、一人々々が自分々々の世界を持つて、自分々々の世界に住んでゐるのである。大雑把に大勢が、一緒にたに、同じ道と同じ様に、ガヤくと進んで行くのではない。實に一人々々が、自分々々の道を、自分々々が歩んで行くのであります。

「同病相憐む」といふ。病氣の苦しさは、病人か又は病氣した人でなくては解らない。それも只病氣といふだけでなく。頭痛持の辛さは、腹痛の人に解らず、脚痛の困り方は、齒痛の人に解らぬ。矢張り同じ質の病氣の人でなくては、其の味が解らぬだけ、それだけ、相憐むと云ふことも出来ない。子供を死なした淋しさ悲しさは、實際子に離れた人でなくては知られぬ。夫に先立たれた手頼なさ不安さは、眞實夫に後れた人でなくては想像だに及ばぬ。とはいへ、いよくの處になると、夫れぐ皆別々でありまして、眞底から之を知り抜くことは出来ませぬ。その氣質に因り、體質に因り、境遇に因りて、受くる所の感じは、悉く別異でありますから、何處までも、人は獨りぐで、自分の世界に住まねばなりません。従つて、眞實に自己を知る者は自己である。

或る事件について、他人に相談を持ち掛けて見る。「好からう、さうであらう」位のことと、「やつて見たまへ」と云ふが關の山だ。半分は決めて呉れても、あとの半分は自分が決めねばならぬ。よし親友とか兄弟とか親とかで、七八分、思切つて九分九厘まで、定めて呉れた所で、残りの三分二分乃至一厘は、自分で定めねばならぬ。たとひそれが命令的に全部を決定して來たかとして、最後の實行者は自分である。人の食うた御飯では、自分の腹は脹れぬ。自分の空腹を癒すには是非とも自分で搔込まねばなりません。この意味に於

て、自分の世界は自分の創造である。自分の外に創造者もなければ、製作者もありません。

然り。私は私の世界を創造しつゝあるのである。燈火は自分で光を放つて、自分の光の真中に住んでゐる。而もその光は、刻々に放つて、刻々に進み行くのであります。私の周囲を包む山も川も、雲の去來も、風の動靜も、人々互に共通のやうに見えても、實の所、共通なるものは、一つもありはせぬ。私は私の天地に迎へ入れられたものでもなければ、境遇に呼込まれたものでもない。世界の創造者造物主は、實にこの私なのである。私が創造するのである。向ふにあつて私を待つのではない、私が勝手に建設し、隨意に製作するのである。佛語を以て云へば、自己以外のものは、すべて自己の依報である。而もこの依報は、主體たる自己即ち正報そのものゝ、表現に外ならない。かくて私は私の世界の主人であります。

昔者、唐の李文公、一日、薬山惟儼禪師を訪れ「如何なるか是れ、惡風船を吹いて鬼國に漂着す」。惡い風が吹いて鬼の國へ、船を流し落すとか云ふことで御座いますが、これは一體どうした譯でしやうと、質問いたしました。時に薬山呵々大笑して、「李 小子、之を問ふ、何の爲ぞ」。李 貴様の如き子悻が、そんな事を聞いて何にする。鼻であしらひ、顎で嘲つてゐる。李文公とまで尊敬せられて居る人が、小兒扱ひにせられては、胸穩かなるを得ない。腹の底の虫がムクムクと動き出して、怒りの様子が顔に顯はれた。禪師ささず。「あゝお怒りですか。その瞋恚こそ、所謂惡風船を吹いて鬼の國へ流すので御座る」とやられたので、李文公グウの音もあがらなかつたが、成程と痛く感心せられたさうです。その感心が、今度善風船を吹いて佛國へ渡すのでありませう。

二 地獄の鬼か極樂の菩薩か

彼の有名な白隠禪師が、駿州原に居られた時の事。明德遠近に傳はり、織田平次郎信茂といふ人、尾州侯東勤の砌、列を脱して禪師の庵を訪ふたのであります。「私は好んで佛法を聞き、修行にも心がけて居るのであります。その内疑問は後返りして、最初に起つた地獄や極樂の事が、氣になつてなりませぬ。その有無が承はりたう存じます」斯様に申上げると、禪師は何に感じられたか、突然大喝一聲、「汝何者ぞ」と、意外の事に面食つた信茂、言下に「武士でございます」と叫んだら、禪師嘲笑ひながら、「何と申す、何！武士と申すか。汝若し武士ならば、武士の道を修むるがよい。君の爲に忠を盡し、事あらば一死以て是に當れば、足るでないか。然るに今この小奴子、徒に餘道に迷ふ。汝でも武士と云ふのか。若し武士ならば、山伏か野伏か。どうせ碌な者ではあるまい」

信茂この語に接し、最早腹は煮えかへるやうに堪らぬが、折角來たのだから、虫を殺して言を改め、「大善知識、よろしく御教を垂れ給へ」と請ふた。禪師は「ウンまだそんなことを云つて居る。こんな奴は山伏や野伏位なら、まだせめて人間の仲間だが、それにも及ばぬ、大方鯉ぶし位だらう」ときた。信茂もう堪まらない。覺えず腰のものに手をかけ、満面朱をそゝいで、額の筋はピリ／＼動く。「さうだ、鯉ぶしならまんだ臺所の用にも立つが、手前見たやうなものは、食ひつぶしであらう」。聞くや否や、信茂「己れ眞二つ」と刀の鞘を拂ひ、禪師目がけて切り付けましたが、禪師もさるもの、するりと身をかはして、二三間向で、お出でくといふ式、怒髪天をつき、心焦立たた信茂、堂上階下逃ぐる禪師を追ひかけましたが、あちらへ逃げ、こちらへ避けた禪師。不意に背後にふりむきて「あな恐しや地獄の鬼が來た」この一言

熱せる信茂の總身に冷水を浴びせかけられた如く、平身低頭、禪師の足下にお詫した。「あな有難しそれ極樂の菩薩が來た」と。斯様に教へられました。あゝ地獄の鬼は遠方に居るのではなかった。地獄の世界は遙か彼方にあるのではなかった。近く我身の内心の底に潜んで居るのでありました。「かいらい師首にかけたる人形箱、鬼を出さうと佛出さうと」鬼も佛も心次第で兩方とも出せるが、さて主人公はどちらであらうか。お客は奇麗に飾つてゐて、主人は粗末な風をして居る。して見ると、如何でも鬼の方が主人らしいよ。人は一生涯かゝつても、子供一人得生ぬ者はあるが、その癖鬼は至つて能く、毎日毎夜に生んで居るらしい。平生生みためた鬼が、臨終の夕にはどやく／＼顯はれて来て、我と我身をせめる。暮れた夜道は何となくお化が出さうな如く、現はれ來る鬼には、赤いのもあるであらう、青いのもあるであらう、黒いのもあるであらう、斑な鬼も居るであらう、友仙染の鬼も居るであらう、ひよつとすると、白粉つけて紅さして三味線さげた鬼も居るであらう。強ち鐵の棒さげたのばかりが鬼ではありませぬ。こんなのが、日にち毎日生れて來るのであります。

三 鬼の念佛親讓りの極樂

否、出て來るばかりが鬼ではなく、鬼を生むものは亦鬼である。鬼の親は鬼に相違ない。或人は、大きな鬼の相を書いて、その上に贊をした。

皆人の心の底の奥の院、開帳すればこれが本尊

私共も一念己れと怒つた其の有様は、全く頭に角がはえては居ませんか、身に鱗が逆立つては居ませんか、心に三熱の苦を感じては居ませんか。奥の院御開帳とあるから、本尊は大切な祕藏佛と思ひの外、大きな恐しい大鬼でありました。自分の外に誰も、自分の落ちる地獄の釜を鑄た鍛冶屋も居な

ければ、自分の生んだ鬼の外に、自分を攻める鬼も居ない。結局自分で自分の地獄を造るのであります。「心の鬼が身をせめる」とは、好く言つたもの。そんなら極樂は如何する。こんな心では到底極樂は出来ない。今度の極樂は親譲りである。親から貰つた極樂へ、私が參るのであります。久しく魔境にあつて鬼の奴となつたのが、彌陀の親御の念力で極樂の本國に、歸る身となつたのである。この親様の念力が私に届いて、重い鬼の舌が念佛に動き、火を吐いた口から、大悲の尊號が現はれて下さる。

我さへも御名を稱ふる身となりぬ、鬼の念佛あやしからまじ(香樹院)
織田信茂の懺悔はこゝである。茲に如來の淨土が其儘私の淨土となる。思ふに鬼の念佛惡魔の稱名、それが眞實の宗教であります。佛が佛となり善人が善人となるに、別に不思議はない。惡人が善人となり鬼が佛となつてこそ超世不遇の本願ではありませんか。斯くて、自分が自分の地獄を造つて、自分の地獄に落つる奴が、親譲りの自分の極樂に參つて、自分が佛になるのであります。併しその間に、遺瀨ない親の念力の働いて居ることを、忘れてはなりません。

四 當然解決すべき生死問題

支那唐の神宗皇帝の時に、蔡君謨と云ふ人がありました。或時宮中に御陪食仰付つて、陛下は殊の外御機嫌である。「汝は實に美しい髻をもつて居る、全體夜眠る時は如何して置く、蒲團の外へ出して寝るか、納めて寝るか」との仰せ。今迄一向そんな事心配しなかつた蔡君謨、「アハー」と云つたきり、一寸御返事に困りました。さて宅へ歸つて寝てから、氣になつて堪まらぬ。俺の髻は至つて上等と見える。今日は畏多くも、天皇陛下から御褒めに預つた。これは一體どうして寝んで來たものか。又どうして休んだらよいものか。

夜の間に摺切れてはならぬと。蒲團の外に出せば、何だか顎が捻ち上げられるやうだし、蒲團の中へ入れば、如何やら押へ付けられるやうだ。さりとて横になつては、髻の癖が悪くなる。如何しても落付かない。出して見たり入れてみたりして、到頭一夜中髻の始末に困つて、眠られなると云ふ話があります。

思へば私共も、この人生問題と云ふ長い髻を提げてゐる。平生何も氣がつかない場合はそれで済んでも、イザとなると薩張り解らなくなつて來る。にも拘らず私共は果して、之に心を懸けて居るか。自分の生活問題や愛欲名利のためには、血を吐く思で數日を苦しんでも、果して人生問題や、死生問題のために、一夜を泣き明した事があるか。誠に蔡君謨の長髻話にも及ばない。慚愧の至りではありませぬか。所詮人生に當面して自覺し來らねば、問題は起らない。問題が起らなければ、従つて最後の解決は得られない譯。

十三年間留學の功を積んで、支那から元氣よく歸朝したといふ、眞觀大徳の許へ、四方より我勝ちにと訪問し、十三年間の出來事や、見聞についての珍談を聞かうとした中に、一老僧ありて、「貴師は長らく支那にあつて、天台を學ばれたさうでござるが、草木國土悉皆成佛と云ふ佛説は、充分御研究あつたであらう。草木成佛の仕方は如何なるものなりや、御知らせを蒙りたい」と、差出がましく尋ねましたら、大徳は黙して何の返答もない。よつて、ハハ十三年間留學と云ふ名は立派なれども、山水の風景などに現をぬかして居たと見える。一泡ふかしてやらうと云ふ心組で、再三再四同じ質問を繰返した處、眞觀威儀を正して「草木國土悉皆成佛の相を御尋ねは結構でござるが、草木國土の成佛より御邊の成佛は如何でござる。最早決定相成ましたか」の一言、グツと老僧の胸を刺した。老僧覺えず「イヤ誠に御恥かしうござい

ます」と答へたので、眞観は再び口を開かず、退席せられたと云ふ話があります。

焦眉の急と云ふは、只この生死解決、求道解脱の一事である。我等の眞實の問題とすべきは、生活の問題でない、成功の問題でない、人生の問題でない、信仰の問題でない、躍動の問題でない、歡喜の問題でない、稱名の問題でない、思想の問題でない、行爲の問題でない。唯々我等の救済の問題である。道を求むると云ふは、この救済の問題の解決に外ならぬのである。

五 虚榮虚飾の夢から覺めて

鳥がをりました。美しく見せやうとて、孔雀の羽を拾ひ集めて、身を飾り孔雀の群に入つて、意氣揚々として居ましたに、炯眼の孔雀に看破せられ、その羽を悉く抜き落されて、またもとの鳥になつて、大笑ひに笑はれましたとか。人はこの笑はれたる鳥に笑はれなかつたら、仕合せであります。實際あらゆる動物の中で、人間ほど見えを氣にするもの、外見を飾るものはありません。人間ほど大の見坊は、他に類がないと申されます。人間一生何から何まで、この見えのために悶きあせつて、いつしか到着するのは、死の帳場である。それで終りかと思へば、尙ほ葬式墓場にまで、見えを張らうとします。驚いたではありませんか。この見えの充分張られたと思ふ時、人は身の前後左右を顧て、誇り心に莞爾する。これが果して眞の莞爾でありませうか。

あらゆる笑止や。此頃の新聞雑誌で、著しく目につくものは、化粧品の廣告である。正體の知れぬ粉や水やに、譯もわからぬ色々な名稱をつけて、囃し立てるものですから、囃し立てられた婦人は勿論、男子までが、一生懸命に塗つたり付けたりはがしたり、それはく忙しいこと。それで少しでも